

拝啓

厳しく照りつける日差しに、本格的な夏の訪れを感じる今日この頃です。そちらはいかがお過ごしでしょうか。……なんてね。堅苦しいあいさつは必要ないか。いつものちよつとした冗談とでも思っておいてください。

それで、どうだろう。元気にしていますか。まあ君のことだし、どこに行ってもうまくやっていると思うけど、心配は心配です。だって君はしっかりしているように見えて、案外抜けてるところがあるから。……怒った？ そりゃまあ、さんざん君に迷惑かけてきた僕に言われたくないかもしれないけど、僕だって少しは成長したんです。男子三日会わざれば刮目して見よ、ってね。ごめん、ちよつと調子に乗った。それでもまあ、時の流れっていうのはすごいね。ほんと。あつというまだよ。

雨のひぐれ

ああ、そういえば、よしおが今度結婚するらしいんだ。それも、なんとお相手が金髪の美人。そんなまさかですよ？ それに、おつていなんかは広告系の会社を立ち上げたつて。そう、つまるどころ社長つてこと。まあ、あいつはもともと頭良かったしそんなに驚かないか。他にはね、暴れん坊だったがつちゃんは実家の八百屋継いだし、なつちゃんも小学校の先生になつてさ、みんなそれぞれ道を進んでる。僕はまあ、うん、なんとかやつてるよ。

少し話が脱線しちゃった。それで、なんでまたこんな突然、君に手紙を書くかと思つたのかというね、この前、自分の部屋の押入れを整理してたら、奥のほうから懐かしいものが出てきたからなんだ。なんだと思う？ その懐かしいものというのがね、水色の色鉛筆と、描きかけの空の絵。そう、君が描きかけのまま置いていった、

あの絵だよ。どうだろう、君はあの日僕に言つたことを覚えてるかな。

*

ジワリとした汗でTシャツがびつしよりと濡れてしまふような、そんな昼下がりに。僕らは道端の木陰に座つて、涼んでいた。

遠くの山並みが、今日はいつともよりはつきりと見える。そんななか、暑さにやられて死にそうになつて僕らの隣で、彼女はせかせかと絵を描いていた。すらりとした綺麗な手には彼女こだわりの色鉛筆。

彼女の真剣さは、気軽に話しかけられるような感じではなかつたので、だいぶ前から僕は黙つて座つていた。

時折、夏草の香る風につて彼女の鼻歌が聞こえてくる。

「……フーン……歪なメロディーでできた、愛されたい生き物だ……」

……全然知らない曲だ。というか、歪なメロディーでできた生き物、つてなんだ？

彼女の性格や、考えていることは非常に難解だ。僕と彼女は幼い頃からのつき合いだが、そんな僕でも時々、彼女の思考や言動がわからない時がある。そんな彼女は周りから見たらただの変な人かもしれないけど、僕はそうは思わない。たぶん同世代の人たちより、達観しているだけなんじゃないかと思う。まあそれを変な人と言つてしまえばそれまでだけだ。

しばらくすると、彼女は一息ついて額の汗を拭つた。横からそつと絵を覗いてみると、今、僕たちの目の前にある田んぼや、遠くに見える山並みを描いたものだった。

あいかかわらず上手だなあと思う。でも、僕がそう言う
と、彼女はいつも必ず「いや、私なんかまだまだだよ」
と言う。まあ、僕よりはるかに絵が上手い彼女がそう言
うなら、きつとそういうものなんだろう。

そんな彼女の絵だが、ただ一つ気になるところがある。
なぜだかは知らないけど、彼女はいつだって空を全部描
くことはしない。一部分は白いまま。

「ねえ、いつも思うんだけど、どうしてここは色を塗ら
ないの？」

となりでスプライトを気持ちよきそうに飲んでいた彼
女がこちらを振り返り、髪がふわつとたなびく。

「ああ、これはね、うーん。今の自分ってこと」

「今の自分とはなんぞや」

彼女は少し考えこむ。

「まだまだ、まだまだ未完成ってことぞや」

「？」

彼女はすこし微笑んで、絵を指さして言う。

「この描いてある空の部分は今までの私で、こっちな
にも描いていない白い部分はこれからの私。つまり……
。んーとね、きつとき、未来の可能性は果てしなく広
がっていると思うんだ。うわきもつ。今のはきもかった
な。えつと、これからも見えるものが増えてくれば、き
つともの考え方は変わっていくんだろ？な、と思う
のよ。それが、寂しくないように、絵は完成させない
んだぜ」

「ふーん」

とは言ったものの、わかるような、わからんような。

「……ふふつ。まあつまりこれからの未来に、その空白
に何を描いていくのかは私の自由ってこと」

なるほど、そう言われると少しわかる気がする。

「……未来かあ……僕は不安でしかないな」
未来。

正直、現時点でこれといってやりたいことのない僕に
とって、あまり好きな言葉ではない。

「そっか……。うーん……。まあたいちゃんは、たいち
やんが納得するように進んでいけばいいんじゃない？
あ、なんか偉そうな感じになってごめんね。そんなつも
りは全然ないんだけど。たださ、たとえ進んでいった先
が、間違いだつたとしてもだよ？ どうせきつとまた、
笑ってやり直せると思うんだ。そうだ。うん、そうだね。
そういう意味でも、この絵の空白は大事ななと思う」
笑ってまたやり直すための空白。

やっぱ僕にはよくわからない。でもそれでいいの
も。

*

あのときの僕は君の絵の空白の意味について、君が何
を言っているのか、いまいちよくわからなかったけど、
今思い返してみると、その意味が何となくだけどわかる
気がする。

まあ何となくだけどね。

えーと、それでなんだつたけな。ああ、そうそう。そ
れともう一つ、この前、がっちゃん達が僕の大好きな花
火を買ってきてくれたんだけど、それが見たときに、ま
だ売ってたんだって驚いてさ、みんなで盛り上がったん
だ。懐かしいなあ。最近はやることもないし、ずっとこ
れを眺めている。

これを見ていると、学校の校庭で君と花火をしたこと
を思い出すんだ。

*

オレンジに街を染めていた夕陽を見送ると、僕たちは
校庭に忍び込んだ。

すっかり人のいなくなった校庭は、日中の喧騒とは打
つて変わって、いまは静寂と暗闇があたりを支配してい
る。

「ねえ、ほんとに見つかって怒られたりしないかな？」

「だーいじようぶだよ。こういうのはやっちゃったもん
勝ちだから」

そう言う彼女は浴衣の袖をめくり、バケツに水を入れ
てせかせかと用意している。

肌の色が比較的白い彼女に浴衣は非常に良く似合い、
とつても綺麗だなあと思う。というか日本の女性で浴衣
を着て綺麗ではない人などいるだろうか、いやいやない。
間違いない。つい二重否定が出てしまうほど断言できる。

正直、久々に彼女の浴衣姿を見られただけでも、僕に
とつては最高の夏の思い出だったが、それに加えて花火
ができるとは、なんともついているとしか言いようがな
い。

「ん？ どうかした？」

手に、水入りバケツを持って戻ってきた彼女が言う。

「いや、なんでもないよ」

「……ははーん。さては私に見惚れてたな？」

「は？ え？ そんなわけ……は？」

「ふふつ。冗談だよ、ジョーダン。それよりさ、早く火
の準備してよ」

「ああ、ごめんごめん」

家からこつそり持ってきたチャッカマンでロウソクに火をつける。ゆらりとした小さな火が僕らを照らす。これで準備は整った。

「ねえ、たいちゃんほどの花火が好き？」

と彼女。

「そうだなあ、僕は線香花火かな。最後に火がぼとりと落ちるのが、なんだか怪しくて好きなんだよね」

「ふーん、たいちゃんらしいね。私はね、これ」

そう言っただけで袋から取り出したのは、勢い良く噴き出るタイプの手持ち花火。確かにちまちました感じの花火より、華やかな花火のほうに彼女には似合うかもしれない。

「ねえ、ちよつといいこと思いついたんだけど」

そう言っただけで、彼女は袋から花火をたくさん取り出してきた。

あんまりいい予感はない。

「なに？」

彼女はにっこりと笑って言う。

「せつかくなんだしき、一気にたくさん使って派手にやろうよ」

おいおい、こどもかつ！と思っただけど、どうせ、そんなことを言おうと「たいちゃんはいつから大人になったの？」とか言ってくるだろうから黙っておこう。これが大人の対応ってやつだ。

「……なんか失礼なこと考えてない？」

「いやいやまさかそんな」

「……まあいいけど。じゃあたいたいちゃんはこれ並べたい」

そう言っただけで彼女が渡してきたのは5、6コの噴出花火。

「え？ これもやるの？」

「うん。こういうのは一斉にやるのがいいんだよ」

「えーでも、危なくない？」

「大丈夫ダイジョーブ」

うーん……ま、いっか。どうせ二人でやるには多すぎる量の花火だ。残しちゃっても、なんかもったいない気もするし、やってしまおう。

「おつけー、じゃあ並べとくね」って聞いてないし。

僕が花火を一通り並べ終える頃には、彼女のスタンプイも完了していた。

「それじゃあ、そろそろやろうか」と彼女は言い、花火をロウソクに近づけていく。

「写真とか撮る？」

「いいよ、そういうのは。それよりも、ちゃんと見ててね？ これだけの花火、きつと面白くなるよ」

そう言う彼女の言葉はどこか真剣味を帯びている。

「うん」

花火特有の少し焦げたにおいが鼻をついた。これから僕らの夏の終わりが、はじまるらしい。

「………ごかもしれないし」

「え？」

「あ、そろそろかな」

あ、ほら。いくよ！

ポツシユウウウウウウ

暗闇をひとすじの閃光が貫いた。続いて二つ、三つ。

僕は慌てて噴出花火たちに火をつけると、その場を離れた。彼女のほうを見ると、楽しそうに踊っている。

暗闇の中で、赤い光が、青い炎が、緑の閃光が、黄色

の流れ星が、彼女の周りでもとどろき、おどろき、はねる。すこい……。

まるで彼女に大きな羽がはえたみたいだ。

バヒユウウウウウウ ポツ ポツ

その背後で、吹きあがるいくつもの花火。色とりどりの光が舞い上がっては消えていく。

光の点滅。七色の閃光。極彩色の世界。

その中を流れるひととき大きな光。そう、彼女はまるで巨大な流れ星だ。

すこい………。すこいすこいすこい、すこい！

楽しそうに跳ねまわる彼女。その姿が僕の目に焼きついていく。

今僕が見ているのは命の輝きだ。瞬きすら惜しむほどの。間違いない、この瞬間がすべてだ。

この瞬間が僕のすべてだ！

「ねえー！ きれいー？」

彼女が聞いてくる。

「きれいだよー！」

今なら、今なら言えるかもしれない。

「あのさー！」

「なにー！」

何年もため込んできたものを。

「ぼくさー、ずっとさー」

「えー？ なんてー？ あ、」

ポヒユウウウウウウ

煌々と世界を照らしていた光は、徐々にその色を失っ

ていく。まるで、夏の終わりを僕らに告げるように。大量の花火の煙が、夜のぬるい空気に溶けていく。

「ちえー、もう終わりかあ」

そう言っただけの中にも花火を捨てる彼女の顔は、ほんとは残念そうだった。

「それで、なに？」

彼女の言葉にドキッとす。

どうしよう、冷静になったら急に恥ずかしくなってきた……。

「……いや、なんでもないよ」

うん、これでいいんだ。なにも言わなきゃいけないわけでもないし。

でも、僕がそう言っていると、彼女はなぜだか少し寂しそうな顔をした。

ふいに鼓動が高まる。

なんだろう、この不安な気持ちはなんだろう。

「そう。じゃあ次やるー」と

そう言っただけで袋に向かう彼女。

もしかして、変わっていくのだろうか。僕も、彼女も、

流れ星の輝きでさえ、変わってしまっているのだろうか。

そうだとしたら、そうだとしたら――

慌てて彼女に声をかける。

「あ、ねえ、来年もさ、ここで花火しようよ」

「うん？ 急いだの？」

「えっと……いやなんか、今ここで約束しておかないといけないきがして……」

「……そう？」

「うん」

「……………」

なにも言わずに彼女は僕の目を見ている。

なんだか気まずい時間。

ふいに彼女はポツリとつぶやいた。

「……………」この世界にさ、変わらないものなんてないの

かもしれないね。でもきつとそれでいいんだよ。変わらな

いとけないんだ。寂しいけどさ」

「……………」

「でもね、だいじょうぶ。変わらないものもぜったいあるから。そりゃ今はまだわからないよ？ でもきつと私たちは、十年たつたら十年前の話を、百年たつたら百年前の話をしてる。もうそれだけでいいんだ。もともとそうやって今を繋いできたんだから」

そう言っただけで彼女はまた少し寂しそうに笑った。

*

このあと結局警備員に見つかって、君はうまく逃げ切り、僕だけ正座させられてこっぴどく叱られたのは今となっては良い思い出です。君は笑うだろうけど、ほんとは大変だったんだよ？ もう少しで親を呼び出されるどころだったんだから。

でもまあ、あの日から様々なことが変わったけど、あの日僕が君に言えなかったことも、果たせなかった約束も、今も変わらずここにあります。今思うと、きつと君はあの時、このことを言いたかったのかな。もう今さら気づいても遅いけど。

それにしても、随分と長くなってしまったなあ。君との懐かしい思い出はまだまだ尽きないし、話したいことも沢山あります。でもそろそろこの辺にしておこうかな。本音を言うと、もう一度くらい君に会いたかったけど、そうもいかないよね。

君の描きかけの絵も、花火セットも、全部全部おいていくよ。もう僕には必要ないから。

ほんとの、さよならだ。

そうだ、最後に一つだけ言わせてよ。

……いや、やっぱり、なんでもないや。

敬具

平成〇〇年〇月〇日

三木 泰斗

浜伊 紀菜様

追伸

わかっているとは思いますが、ちゃんと信号のある横断歩道を渡ってね。

あとがき (読まなくてもいいですよ)
こりない男、雨のひぐれです。

そんなまあ、いかがだったでしょうか。この作品においての自分の一番の挑戦は、登場人物に名前をつけたことです。そう、今あなたが思った通り、ピノはうめえ。まあ別にピノはそんなに好きではないが。

そう、今あなたが思った通り、私はですね、今まで登場人物に名前をつけてこなかったんですよ。なんで？と思われるかもしれませんが、まあそれにもそれなりの理由があります。でも面倒だから書きません。

あ、ちなみに彼女「はまい きな」って読みます。読みづらくてすみません。彼女のセリフ回しの一部に若干見覚えを感じた人は、見覚えを感じた人ですね。

それにしても、浜伊ちゃんにしろ、三木君にしろ、ひどいネーミングセンスですね、まったく。なんかちよつと考えすぎてしもたんですね。でも今さら変えるのもねえ……。誰かさんに提案された「木ノ皮剥二郎」は論外だし、ま、いっか。

それと、彼女の鼻歌は実際に存在する曲です。別に作品とそんなに関係ないけど、気になった人は調べてみてはいかがでしょう。t a c i c aってバンドのnew songって曲です。歌詞を深く考えると面白いバンドですよ。

……なんでこんな上から目線なんだ？ というかどうかどうしてあとがきを書くところなるんだ？

あ、本文中の浴衣のことで異論がある人は法廷で会いましょう。

それでは閉廷！ いや、裁判しないんかい！
うわきむっ。 あ、おわりです。